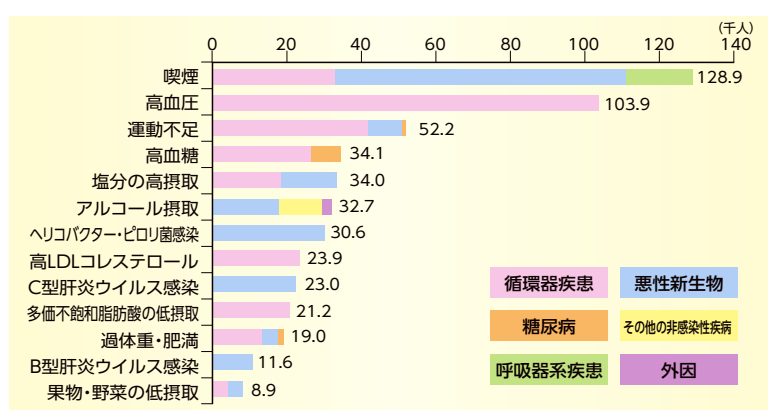


【図1】〈リスク要因別の関連死亡者数〉



資料: Ikeda N, et al: PLoS Med. 2012; 9(11): e1001160.
 (注) 日本における2007年の非感染性疾患と障害による成人死亡(96万件を対象)について、喫煙・高血圧等の予防可能な危険因子別に死亡数を推計したものを示す。

特別対談

のどの健康から考える「健康寿命」

受動喫煙のリスクをなくすために今、私たちにできること

急速に高齢化が進む日本では、健康寿命の延伸が大きな社会課題となっています。そのために欠かせないのが、たばこによる健康被害の防止です。子どもをはじめ非喫煙者にも影響を与える受動喫煙対策の必要性を呼びかけている東京都医師会の尾崎治夫会長と、のどの健康を守る医薬品メーカーである龍角散の藤井隆太社長が、健康寿命を延ばすために今、必要なことについて語り合いました。

考えている以上に深刻なたばこの被害

藤井 たばこを取り巻く状況は変わりつつありますが、私には音楽家なので、たばこは吸いません。ところが、私が社長に就任した22年前、弊社には喫煙に関する制限が全くありませんでした。健康関連企業がこれではダメだと思いつき、段階的に喫煙対策を進めました。本社、工場、営業所とも全面禁煙を実施したのは10年ほど前。全面禁煙に踏み切ったのは早い方だったと記憶しています。

尾崎 確かに20年前に比べると、ずいぶん変わったと感じています。でも、たばこによる健康被害の甚大さを考えると、まだまだ十分とは言えません。



ふじいりゅうた ●1959年、東京都生まれ。朝陽学園大学音楽学部及び研究科修了。パリ留学でフルートの腕を磨く。その後、小林製薬、三菱化成工業(現・三菱化学)を経て、94年に龍角散に入社。翌年から現職。現在もフルート奏者として、コンサートへの出演や後輩の指導を行う。東京商工会議所1号議員、日本商工会議所社会保険専門委員、厚生労働省社会保険審議会医療保険部会臨時委員。

健康寿命を延ばすためには、私たち一人ひとりの意識が重要だと思います。

株式会社龍角散 代表取締役社長
藤井隆太氏

藤井 さすがに全面禁煙にした時は、社員からかなり抵抗がありました。それでも「たばこのどの健康を損なうだけでなく、あらゆる病気や疾患に悪影響を与えるのだから」と、一人ひとりを説得。今では勤務時間に喫煙する社員は一人もいません。

尾崎 おっしゃる通り、たばこの健康被害は深刻です。たとえば、日本人の死亡原因



おざきしげお ●1951年、東京都生まれ。順天堂大学医学部を卒業後、同大学循環器内科学講座で講師を務める。90年、おざき内科循環器科クリニックを開院。東京大学医学部副会長を経て、2015年より現職。受動喫煙を防ぐための条例の制定の必要性を訴え続けている。日本医師会理事、日本内科学会認定総合内科専門医、禁煙学会認定禁煙専門指導者。

のどの健康を維持するためにも、受動喫煙対策は欠かせないでしょう。

公益社団法人
東京都医師会 会長
尾崎治夫氏

1位は「喫煙」です(図1)が、WHO(世界保健機関)の調べでは世界的には「高血圧」が1位で、「喫煙」が2位だそうです。なぜ日本では逆転しているのかというと、十分な喫煙対策ができていないから。この最大のリスク別死亡要因である「喫煙」に対して手を打たない限り、健康寿命を延ばすことはできないというのが、私の揺るぎない考えです。

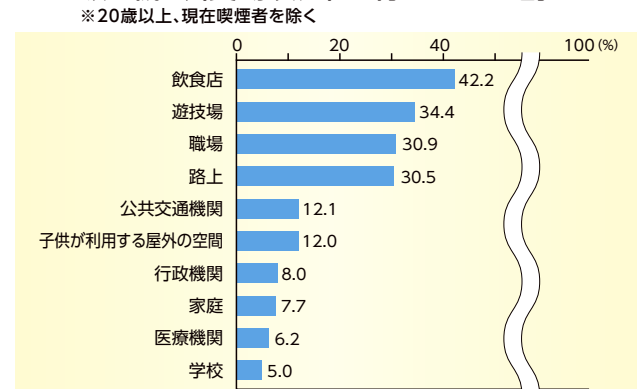
藤井 最近、受動喫煙の話題をよく耳にします。私は社外での食事会では、全面禁煙の店を選んでいますが、そうではない店に招かれることもあります。喫煙者の方は喫煙ルームや屋外で吸ってはくれませんが、それでもたばこの臭いはすぐわかりますし、ましてや同じ部屋で吸われると……。たつた一人の喫煙者でもその影響は大きいですね。

尾崎 たばこがあるから当社の製品が売れるのではないかと言われることもありませんが、とんでもありません。私たちの使命は、生活者の方たちに健康になっていただくことです。そのためには、まずは社員が健康でなければなりません。考え、社内全面禁煙をはじめ、一日一万歩を早足で歩くことや、健康診断・がん検診受診を促進するなど、健康経営を実践。平成28年度東京都職域連携がん対策支援事業で奨励賞をいただきました。

藤井 健康寿命の延伸が重要視されている今、そういう企業が増えてきたことはたいへん良い傾向だと思います。

尾崎 健康は一人ひとりが自分で作るも

【図2】自分以外の人が吸っていたたばこの煙を吸う機会(受動喫煙)を有する者の割合 ※20歳以上、現在喫煙者を除く



資料:2016年国民健康・栄養調査(厚生労働省)



のかつての日本人は「家庭薬」を使うなどして、軽い症状の場合は自分で対処していました。ところが、今では何でも医療保険制度に頼るようになってしまった。その結果、服用しきれない薬が処方されたり、服薬コントロールできないお年寄りが増え、医療費が膨らみ、医療保険制度そのものの存続が危ぶまれています。